

市野川です。今日は、皆さま、休日の中、またお忙しい中、山本泰先生の最終講義にお越しいただき、ありがとうございました。気の利いた話にはなりません、山本先生との思い出として、学問的なことを一つ、学問には直接、関係しないことを一つ、お話ししようと思います。

一つ目ですが、山本先生は、私にとって、昨年三月に退職された内田隆三先生と同様、二重の意味で「先生」です。つまり、同僚として「先生」と呼ばせてもらうだけでなく、社会学そのものを学生のときに教わったという意味で、文字通りの「先生」です。山本先生が二重の意味で先生だというのは、佐藤俊樹先生や瀬地山先生も同じだし、というか、その度合いは、佐藤先生が私たち三人の中では一番、強いと思います。

今から30年以上前、1985年のことです。当時、私はまだ学部の3年生でしたが、大学院に進むことも考えていたので、ちょっと背伸びして、その年の日本社会学会の大会をのぞきに行きました。大会のシンポジウム企画の1つに「古典の現代的解読」というのがあって、発表者は、今田高俊、山本泰、架場(か)久和。討論者は、厚東洋輔、上野千鶴子、江原由美子、という、名前を見ただけで、もうお腹一杯という感じのシンポジウムですが、山本先生はそこで「デュルケムを超えて」という発表をなされた。1年後に同名の論文も発表されますが、この時の山本先生の話は今でもよく覚えています。

その発表で、山本先生は、デュルケムで重要なのは、社会的事実を「物」のように見る、だとか、機械的連帯から有機的連帯へ、というようなことでは全くない。デュルケムで重要なのは「19世紀の言葉でもって、19世紀の言葉と闘った」ことなんだ、とおっしゃりながら、デュルケムをフーコーにつなげ、そして、フーコーの『監獄の誕生』の、「自由の概念を発見した啓蒙時代は、規律・訓練をも考案したのだった」という一節を引用した。『監獄の誕生』を読み返すとき、今も私は、この一節とそれを引用した山本先生の姿を思い出します。

テキストというのは、そこを中心にテキスト全体が回転しているような要所がいくつかあって、今の一節は、そういう要所の一つでしょう。『監獄の誕生』は私もその時すでに読んではいましたが、山本先生の話聞いて初めて、「そうか、この本はそこから読むのか」というのが分かった。しかも、フーコーだけでなく、デュルケムについても、どう読むべきかを、あわせて教わったように

思います。

しかし、テキストを読むことは、山本先生の社会学にとって、さほど重要ではありません。山本先生の真骨頂は、やはりフィールド・ワークだと思います。

それに関連して、ですが、1990年から92年のアメリカでの在外研究で、山本先生は、少し変わったような印象を、私個人は持っています。私の元の指導教員の吉田民人先生がご退職になり、92年の10月から半年ほど、山本先生が私の身を引き受けてくれたんですが、面談のときに、当時、公開されたスパイク・リーの『マルコムX』などからめて、山本先生がとても熱く、アメリカの公民権運動について語ってくれたのを覚えています。公民権運動の歴史をまとめた『Eyes on the Prize』という番組を、先生はわざわざ自分でダビングして、私にくれましたが、そのビデオは、その後、私自身が授業で使わせていただきました。今も私の研究室にあります。

山本先生のそれまでの印象は、先ほどの1985年の学会発表もそうですが、すごく切れる知性の刃を、自分にも他人にも突きつける、というものでした。しかし、公民権運動について熱く語る山本先生を見て、「先生も、そういうことに、素朴に感動するんだ（なんだ、やれば、できるじゃないか）」と、私はちょっと意外に感じました。どちらかと言うと、私は後者の山本泰の方が好きですが、しかし、多分、両方、合わさって、「山本泰」なんでしょうね。

学問や社会学の話はこれくらいにして、もう一つ別の話をします。

ここは18号館で、私たちがいる研究棟は2号館ですが、その2号館で、私は山本先生と、人気のない土日に会うことが多かったです（昨日も会いました）。土日に何をしていたかと言うと、先生は、2号館の6階にある機器室で、私たちがお世話になっているサーバーを相手に、あれこれ作業をしていることが少なくなかった。

もう一つ覚えているのは、ある雪のふった日の、多分、夕方だったと思いますが、2号館横のホッケー場の下ってゆく階段のところで、スコップ持って、雪かきしてるんですよ。山本先生が。聞いたら、「いや、この雪がそのまま凍ったらさ、明日の朝、この階段で滑ってケガする人が出るでしょ」と言うんです。

サーバーの管理にしても、雪かきにしても、山本先生のそういう姿を見て、

あらためて思ったのは、本当に重要な仕事は「見えない」ということです。シャドウワークという言葉もありますが、なぜ見えないかと言うと、そういう仕事は、みんな、やってもらって当たり前とと思っているから。逆に、ちゃんとやってもらえないとき、つまり、メールのやりとりができなくなったり、誰かが滑ってケガしたりして初めて、そういう仕事は「見える」ようになる。

山本先生は、副研究科長をはじめ、いろいろな要職につかれましたが、そういうはっきり「目に見える」要職だけじゃなくて、見えない「要職」、重要だけれども、見えない仕事も、実にたくさん引き受けてこられたと思います。

今回の最終講義を準備する過程で、私もいろいろな人に各種のお願いをしましたが、皆さん口々に「他ならぬ泰先生のためですから」と言って、快く引き受けてくれるんですね。この会場で、今、ビデオ・カメラを操作していただいている上遠野（吉範）さんも、その一人ですが、これは、山本泰に関する、私の最も新しい発見です。

キブ&テイク、ウィン・ウィンの関係だから、他人のために何かをする、というのは、よくあることです。しかし、「他ならぬ泰先生のためだから」と言って一肌ぬいでくれる人たちの様子を見てみると、キブ&テイクだけでは、何か足りないような気がする。なんで、みんな、そうしてくれるんだろう、と考えていたら、「ちょっと、待てよ」「他ならぬ山本先生の最終講義だから、と言って、一肌ぬいでいるのは、俺だってそうじゃないか」ということに、昨日の夜の12時ぐらいに気がつきました。

なんで、私自身が一肌ぬいでいるかと言うと、それはやっぱり、2号館6階の機器室で、人知れず、黙々と、サーバー相手に作業していたり、雪かきしていた山本泰を見てしまったからだと思うんです。「デュルケムを超えて」の山本泰だけだったら、私もここまではしなかったでしょう。

他人からもらうことしか考えていない人は、結局、何ももらえないか、貧しいものしかもらえない。他人に進んで与える人が、意図せざる結果として、多くをもらうのだけれども、本人は端から、あまりもらう気がありませんから、もらったものをまた進んで他人に与えて、それでまた、もらうものが増えて、というメカニズムが、少なくとも social capital というものには当てはまるのではないか。山本先生を見てみると、そういう気がします。

話をまとめますと、先ほど「すごく切れる知性の刃」などとおだてましたが、山本先生ぐらいに頭のいい人は、これからも東京大学から、そこそこ出ると思います。他方、見えないけれども、重要な仕事を担う人は、今の東京大学にもいます。しかし、見えない仕事を引き受ける人であって、かつ、それが山本泰のレベルの知性である、という二つの条件を満たす人は、多分もう現れないのではないかと思います。

さらにまとめますと、私の言いたいことは二つです。一つは、「山本先生、これまでいろいろなことを教えてくれて、ありがとうございました」。そして、もう一つは、「お疲れさまでした」。

——私の話は、以上です。